

「高校野球特別規則（2024年版）」改正及び制定の要点解説

日本高等学校野球連盟

審判規則委員会

今年度、以下の3点について変更した。

① 1. 「高校野球で使用できるバット」

投手の打球による受傷事故防止、投手の障害予防対策の更なる前進を目的とした「金属製バットの新基準」（令和4年2月18日制定）に関して、2022年、2023年2年間の猶予期間が終了し、2024年シーズンインから公式戦での使用は新基準バット（グリップ部にRを表示）のみ使用できることとしました。

② 15. 「タイムの制限」〈一部追加, 改正〉

（1）内野手（捕手を含む）が投手のもとへ行ける回数を、1イニングにつき1回1人だけとする。
を追加する。それに伴い、従来の規則を繰り下げる。

当該規則の主たる目的は試合のスピードアップを図ることです。高校野球の魅力の一つは、時間制限のないスポーツの中でもスピーディーな試合運びで、その一投一打が、選手たちの成長や感動を野球ファンに与えてくれていることです。しかし近年、内野手（捕手を含む）が投手のもとへ頻繁に行くケースが散見されるようになりました。MLBはじめNPB、アマチュア野球界も試合時間短縮、ボールゲームの原点回帰に向かっていきます。高校野球においても、その原点回帰の視点に立ち本規則改正とし、社会人・大学野球と同じ運用にすることとしました。

③ 27. 「投手の投球姿勢」〈削除〉

28. 「反則投球の取り扱い」〈削除〉

2018年度の規則改正では国際的な基準に合わせて、反則投球の定義38に関する【注】が削除され、5.07(a)(1)および(2)に定められた投球動作に違反して投球してもペナルティを課すことがなくなりました。（走者がいないときのいわゆる“二段モーション”に対してペナルティは課さないとするための処置）

2020年度の規則改正では、日本野球科学研究会の研究報告から、投手の変則足上げモーションによる打者のパフォーマンスに影響はないこと、投手への影響も実質的になく、投手障害の危険性もないことの結果報告を踏まえ、「投球動作をスムーズに行わずに、ことさらに段階をつけるモーションをしたり、手足をぶらぶらさせて投球すること」という文言が削除されました。しかしながら、技術的な面においても、マナーの面においても“二段モーション”は望ましい投球フォームではない、という考え方に変更はないと強調をされています。あわせて、走者がいる場合において投球動作が一時停止した場合には、打者に投球しても、塁への送球にしても“ボーク”となるのは今まで通りです。

当初、高校野球は裾野が広く、また、主大会がトーナメント方式であり、打者が初めて対戦する投手が多いとの理由から、投球姿勢に制限を設けていました。しかしながら、相応の期間が経過したことに加え、昨今のテクノロジーの進化で、大学・社会人・プロをはじめとした他の上位カテゴリーの投手の投球フォームを参考にする投手が増えています。高校野球においても、投手の投球姿勢を公認野球規則通りとしました。

前記、高校野球特別規則 27 削除にともない、高校野球特別規則 28 (1) は削除とし、(2) (3) は規則定義 38 と重複することから表記を削除することとしました。

また、特別規則改正に伴い、【手引き】 p44 2. および p45 3. (5) 後段、したがって～以下を削除し、規則 5.07(a)の通りとする。ご確認ください。



参考文献

※1 「投手の投球動作についての科学的視点からの提言」(日本野球科学研究会)【PDF】

以上